

# 〔6〕 それぞれの民俗舞踊 ～精神と肉体をあざなうように

1990年3月30日 東京新聞 夕刊

## ●クセと精神性

ひとは誰でも、快い動きをしたという気持ちや、自分を他人の目に美しく見せたいという願望をもっているもので、それが長いあいだにそのひとの身体的美意識や動きの規範を形づくっていく。そういう独特の動き、つまり個人的なクセには、そのひとりごのうぬぼれや自己嫌悪、発展的願望から自信の欠如、周囲へのいらだちにいたるまで、精神生活の光と影がこまやかに投影されているから、これに注意深い目をそそぐなら、かなり多くのことが分かるだろう。

こうしたことは、ひとつの民族全体についても言うことができる。どの民族も日常的なジェスチャーには明確な型を持っていて、そのなかで育ち暮らしているあいだは無意識でいるが、いったん外に出て他の民族と出会うと、それぞれの差異に驚かされ、振り返って、それと知らずに生きてきた自身の民族的な特性にも気づかされることになるのである。

舞踊も同じことだ。おおかたの古典舞踊はまず民族固有のものである。そしてふつう民族舞踊にはきわめて特徴的な動きや型が組み込まれているから、たとえばポーランドのマズルカとかインドやタイの踊りと聞いただけで、もうその姿や手振り足振りが何となく浮かんでくるほど個性的なものである。しかも、そうした民族舞踊の特徴は、単に表面的な形の問題としてあるのではない。その背後には、ある精神性の広がりがあって、民族舞踊を見る楽しみというのは、独特な姿かたちや動きをめぐることである以上に、その精神性に触れ、これにひたることであるように思われる。

## ●だが肉体から

しかし精神だけで舞踊が成立するかと言えば、残念ながらそうではない。高度な舞踊は何よりもまず安定した動きを要求する。狂いのない動きと言ってもいい。その動きがまるで磨かれた鏡のように精神の深みを映し出す

## 〔6〕それぞれの民俗舞踊

～精神と肉体をあぎなうように

1990年3月30日 東京新聞 夕刊

のであって、動きが不安定だと、すべては表面のさざ波に掻き乱されてしまう。

狂いのない動きには、強靱な肉体が必要である。その筋肉は一朝一夕には育たない。怠けごころは許されず、ほとんど常に肉体的な痛みを伴う。古典舞踊の精神性は、もしかしたらその長い修練の期間に耐え忍んだ痛みや苦しみ、克己心などによって作られるのではないかと、本気で信じたくなるほどだ。しかもその筋肉というのが、初めから所在の明らかなものでないから、なおのこと、やっかいなのである。筋肉というものは、強くなつて初めて存在を主張するもので、弱いうちはあるかないから定かではない。

### ●真っ直ぐに立つ

どんな舞踊でもまず例外なく、「基本の第一は真っ直ぐに立つこと」と言う。簡単なようだが、じつはこんなに難しいことはない。「真っ直ぐ」の具体的内容は舞踊ごとに違うのである。別の言い方をすれば、真っ直ぐに立つために用いられる筋肉が、舞踊によってまったく違うのだ。そして、そのとき使われている筋肉、つまり緊張させているポイントに意識を置いて、それをつなぐようにして、体全体の図式が出来上がる。

### ●「腰」も「肩」も

その結果、体の部分を示すもつとも平凡な言葉さえ、その意味するところが舞踊ごとに違うものとなる。たとえば「腰」にしても、バレエで言う「腰」と日本舞踊の「腰」は違う。バレエでは腰骨の先端を重要なポイントと考える。踊りながら自分の体全体を略図としてイメージするとき、そのポイントを意識から外すことはまずない。それに対して、日本舞踊の「腰」は足の付け根である。その部分をしっかりと固定して体の構えを作らないと、独特のどっしりとした安定感がでない。だから、日本舞踊では「腰を使って足を上げる」などと言うが、バ

## 〔6〕それぞれの民俗舞踊 ～精神と肉体をあぎなうように

1990年3月30日 東京新聞 夕刊

レリーナがこれを聞いたら、何のことやら、わけがわからないだろう。

同様に「肩」というのも違っている。バレエの「肩」は肩先の尖った角のところ、これを上手に使うと、なんとも小気味の良いシャープな魅力がでる。ところが日本舞踊と言えば、原則として肩先はできるだけ目立たないようにする。それもそのはずで、日本の着物は首から手首まで一直線になっていて、その途中に模様があったりするから、肩先はむしろ邪魔なのである。日本の「肩」は俗に「肩が凝る」というときの筋肉で、着物のきれいな胸元は、ここをしっかりと後ろに引くことで出上がる。その証拠に、「肩をすくめる」ことをフランス語では「肩を上げる」という。鏡に向かって実演してみれば一目瞭然、上がっているところがフランスの肩、すくんで（縮んで）いるのが日本の肩である。

ちなみにフランス語には「肩が凝る」という表現がない。フランス人はふつう肩が凝らないのだが、しかし日本に来てから肩が凝るようになったと、あるフランス人は嘆いた。

こうしたことは、いったい何に由来するのだろうか。舞踊の基本姿勢や躍動性の違い、跳躍、回転の多寡などについては、農耕民族と騎馬民族の違いだとか、風土の差だとか、諸説あるけれども、これという説には、いまだお目にかかったことがない。ただ、服飾、建築、産業など、人間生活に関わるすべてが舞踊に反映していることは確かである。

そしてそれは舞踊に限ったことではなく、音楽、美術、文学など、芸術の各ジャンルに関して、やはり同じことが言えるのではないかと思うのである。いっそ舞踊の具体的な問題を、たとえば文学に移しかえてみたらどうだろう。フランスの文学と日本の文学のそれぞれに特徴的なリズム、ステップ、体の構え、初めと終わりの型などを考えてみると、とても面白い分析ができそうで、そこそ心が踊るような気がするではないか。

〔6〕 それぞれの民俗舞踊  
～精神と肉体をあぎなうように

1990年3月30日 東京新聞 夕刊

。